

特集にあたって

東京慈恵会医科大学脳神経外科 谷

諭

脳脊髄液（cerebrospinal fluid：CSF）は脳脊髄の組織間液であるという概念が近年になり受け入れられているものの、その生理的役割は依然不明な点が多いようです。また、その産生から吸収、そして循環動態（循環と称してはいけなかもしれませんが、ここでは一般向けにそのまま用います）に関してもこれまでの解釈の誤りなどが正されつつありますが、依然、精力的な研究をもってしても解明されていないのが現状です。残念なことに、トレーサーを用いても CSF そのものの循環を把握しているとはいえず、さらには解析が難しいとされる流体力学的要素、そして明らかな動物種による違いという問題も立ちはだかっているようです。

このように、基礎的研究の進歩が難渋している中で、髄液減少症という新しい疾患概念やその他種々の髄液循環に関連する疾患が時として社会も巻き込み注目されることで、基礎的背景に先行して臨床経験の積み重ねで治療方法などが確立してしまうことに不安を覚えてしまうことも事実です。われわれ臨床家には、病態生理を礎とした適切な治療方針を立てることが求められていることは自明の理です。その意味から、今回の特集では、脊髄神経根での吸収も含めた CSF の産生・吸収、最近の MR を用いた髄液循環動態の検討、そして CSF の役割などをあらためて最新の知見を含めて紹介していただきました。論文を拝読していきますと、本当に素晴らしい報告ばかりで感嘆しました。普段、臨床現場で接している読者の皆様も、CSF の不思議さと重要さをあらためて確認されるのではないかと思います。

そして、脊髄空洞症、くも膜嚢胞などの脊髄嚢胞性疾患、癒着性くも膜炎、そして髄液減少症という CSF に関連の深い疾患の病態生理を髄液循環の見地から迫ればと期待して、解説していただきました。髄液というものを主語にして病態を掘り下げていくことで、日頃とは違う視点から臨床的検討ができ、かなり興味深いものになりました。

今回の特集を通して、臨床の現場でも病態生理に基づいた的確な治療を提供することができるようになること、さらに、近い将来に新しい治療法などが考案されることを期待します。

末筆になりますが、今回、本特集の趣旨にご同意いただき、精力的な執筆をしてくださった諸先生方に深謝いたします。